

平成15・16年度
「帰国・外国人と共に進める教育の国際化推進地域」最終報告書

都道府県名： 兵庫

市区町村名： 西宮市

研究主題： 共存・共生・共伸をめざす国際教育の創造

(趣旨)：世界の人々と関わり、異なる文化や価値観を持つ者への理解と寛容を培うとともに、日本を知り、自己を確立して、豊かに自己表現する力を養う、すなわち、相互啓発を通して西宮の子どもたちの国際化を進め、地球市民の育成を図る。

国際化推進地域の概要

1. 平成16年9月1日現在の在籍児童生徒数

帰国児童生徒数	442人
中国等帰国児童生徒数	0人
日本語指導が必要な外国人児童生徒数	27人

「帰国児童生徒」欄は、海外に1年以上在留した人数

2. 地域の特色(帰国・外国人児童生徒の分布状況等の概要)

西宮市が甚大な被害を被った、「阪神・淡路大震災」より10年が経過し、一時減少していた人口も今では震災前を遙かに超えるほどに増加し、文教住宅都市・環境学習都市として、更に住みよい、活気ある街づくりに取り組んでいる。

本市は、大阪と神戸の中間に位置して生活環境や交通の便にも恵まれ、企業等の社宅も多いことから、従来より、例年400人を超える帰国児童生徒が、市内各地に分散して在籍している。

また、市内には10の大学及び短期大学があり、市民の教育への関心は非常に高い。近年、大学の教職員や研究生、また、領事館や企業等に勤務する外国人が子どもを連れて来日するケースが増え、日本語指導を必要とする外国人児童生徒を受け入れる学校が増えてきた。特に、本市南東部の高層住宅街地域を中心にして、タガログ語を母語とする児童生徒の西宮市立学校への就学が2～3年前より始まり、今後ともその増加が見込まれる。

3. 帰国・外国人児童生徒の実態(母語、在日期間、日本語能力の程度、学校生活の適応状況等の概要)

帰国児童生徒の実態については、出国時の年齢や、海外在留期間だけでなく、海外で通っていた学校の実態、すなわち、現地校であったか、日本人学校であったか、また、週末に補習校に通っていたかなどによって大きく異なる。近年、CD-ROMやインターネット活用の通信教育などが充実し、海外においても国内にいるのと同様の学習ができるようになったこともあり、帰国後、日本語能力の遅れのために学校生活への適応が著しく困難になるようなことはあまりない。しかし、集団行動がうまくできない帰国児童生徒も少なくなく、一クラス当たりの児童生徒数が多い日本の学校では、個に応じた指導が十分でないとの不満を訴える保護者もいる。

一方、日本語の日常会話もできない状態で入国する機会が多い外国人児童生徒に関しては、日本での生活への適応に問題が生じることが多い。出身国の文化・風俗や、保護者の経済力・価値観など個々の背景は様々であるが、所属学年や担任の決定を含め、日本語指導やテスト問題の作成・評価など、多方面において、特別な配慮を要するケースが多々見られる。本年度本市に在籍している日本語指導を必要とする外国人児童生徒の母語は、タガログ語、インドネシア語、英語、中国語などで、その在日期間や、抱える問題は様々である。特に、小学校の高学年から中学生の年

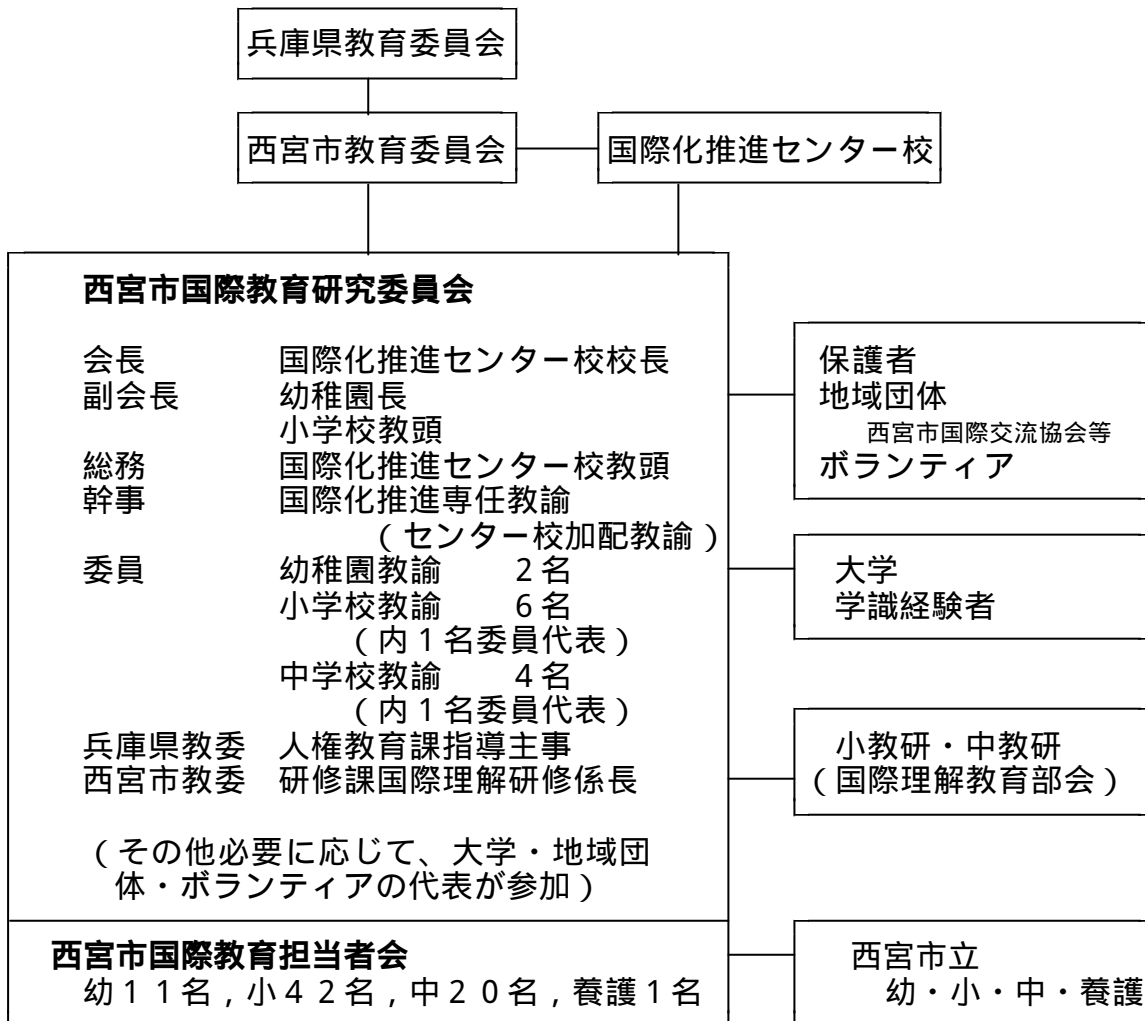
齢で入国して、学校の授業について行けない子どもの日本語指導や進路指導は、母語の保持と並んで大きな問題となっている。

学校・保護者・教育委員会が連携を密にしてそれぞれの児童生徒に最もふさわしい受入態勢を取り、帰国・外国人児童生徒に自己有用感を持たせ、他の児童生徒との相互啓発が進むように西宮教育の国際化を図っている。

国際化推進地域における体制の整備

1. 教育国際化推進連絡協議会の概要

(1) 構成員及び各構成員の連絡協議会内における役割 (図等を用い、わかりやすく記述すること)



西宮市の教育国際化推進連絡協議会を西宮市国際教育研究委員会とする

(2) 国際教育研究委員会における活動内容と成果

国際教育研究委員会を年間11回、定期的を開催して、

ア 帰国・外国人幼児児童生徒の実態調査及び受入状況調査の実施

イ 帰国・外国人児童生徒の受入態勢の充実及び適応状況についての事例研究

ウ 国際教育研究保育及び小学校と中学校の国際教育研究授業の計画と実施

エ 幼稚園、小学校、中学校それぞれの国際教育年間指導計画モデルプラン及びカリキュラム作成

オ 研究紀要「あゆみ」、6言語対応の保護者用資料「帰国・出国・入国される保護者の皆さんへ」、教師用資料「国際教育の手引き」等の改訂と作成

などを行い、西宮市の国際教育推進の中心的組織としての機能を積極的に果たすことができた。また、国際教育研究委員会のメンバーが、国際教育担当者会においてリーダーシップをとることによって、それぞれの学校園での国際教育を充実させるとともに、実態調査や受入調査への協力、国際教育研究保育・授業やセンター校行事等への参加と協力、各学校園における国際教育の実践交流や国際教育

実践集の作成などを行い、本市の国際教育を全市的な取組とすることができた。

平成17年(2005年)1月28日(金)には、国際教育研究発表会(研究主題「共存・共生・共伸をめざす国際教育の創造」)を開催し、A幼稚園、B小学校、センター校(中学校)での公開保育・授業に続いて、センター校で全体会を行って、本市の国際教育を全国に発信した。JSLへの取組など、国際教育研究委員会の今後の課題を確認することができた。

2. 国際化推進センター校の概要

学校名：		担当教員氏名：			
TEL：		FAX：			
住所：					
HP：					
帰国児童生徒		10人			
外国人児童生徒		英語	2人	その他	0人
		中国語	2人		

3. 国際化推進センター校での指導内容等(日本語能力別に分類して記入すること)

日本語能力	指導を開始してからの期間	年齢	指導内容
日常会話以外(教科科学習等)も可能	11ヶ月 ~ 22ヶ月	9才 ~ 15才	市販・自作の日本語教材や学校で使用している教科書などを用いて、学習言語としての日本語の読み書きを指導するとともに、日記や自由作文を定期的を書いて提出させ、その添削指導などを通して表現力の向上を図った。
日常会話が可能	7ヶ月 ~ 11ヶ月	11才 ~ 14才	文部科学省の指導資料や、市販・自作の日本語教材を用い、文型練習を軸にタスクで発話を促しながら、正しい日本語会話の練習を繰り返した。また、カタカナ・ひらがなを始め、初歩的な日本語の読み書きを教え、学習語彙を少しずつ増やして学習言語につなげることをめざした。
日常会話も困難	2ヶ月 ~ 7ヶ月	7才 ~ 13才	挨拶などの基本的な日常会話を中心に、市販・自作の日本語教材を用いて、「聞く」「話す」を重点的に指導した。また、カードを使ったり、絵を描いたり、色々なゲームなどで日常会話の語彙を増やして、積極的に発話するように指導を続け、徐々に読み書きに入った。

市内の4カ所に開設した日本語教室で、子どもたちの学年や日本語能力に合わせ、マンツーマンによる個に応じた体系的な日本語指導を年間34回実施。

平成16年度の具体的な取り組みとその成果について

1. 研究趣旨を達成するために実施した活動及びその成果

学校園における国際教育の推進を支援し、内容の充実を図ることができた。

ア 総合的な学習の時間・特別活動・学校行事等で進める国際教育

- ・帰国・外国人児童生徒の保護者、近隣の大学の留学生、海外経験のある地域住民等と連携した取組の支援

- ・近隣の民族学校との交流
- イ 小学校英語活動の推進
 - ・ALTとのチームティーチングの推進(42の全市立小学校で実施)
 - ・担任が一人でできる英語活動の授業研究
- ウ 海外の姉妹校等との国際交流の推進
国際理解教育研修会に参加して学校園で国際教育を効果的に進める方法について学ぶとともに、日本語指導法の研修を深めることができた。
- ア 第1回(7/22)
 - 「日本の教育に思うこと～カナダの多文化教育を通して～」
講師 関西学院大学大学院教授
 - 「国際理解教育における参加体験型学習の開発」
講師 西宮市国際教育研究委員会委員
- イ 第2回(8/26)
 - 「年少者のための日本語教育～普段着の国際理解教育～」
講師 神戸大学留学生センター助教授
 - 日本語教室を開設して個に応じた日本語指導を進めるとともに、市内の帰国
- ・外国人児童生徒たちの交流の場とすることができた。
- ア 総合教育センターをはじめ、市内4カ所において、年間34回実施
- イ 帰国・外国人児童生徒の日本語習得についての事例研究
- ウ 西宮市国際交流協会及び西宮日本語ボランティアの会との連携
国際化推進センター校専任教諭のリーダーシップと各学校園の国際教育担当者の協力の下にセンター校行事を企画・実行し、市内全域の帰国・外国人幼児児童生徒及びその保護者たちの交流を図ることができた。
- ア 帰国・外国人幼児児童生徒と保護者の夏休み交流会(7/27)
 - ・センター校生徒会役員による司会進行による歌とゲーム
 - ・帰国・外国人幼児児童生徒保護者の指導による世界各国のおやつ作り
 - ・姉妹都市(米国スポーケン市)よりの招聘ALTによる日本での異文化体験談及び歌・ギター演奏
- イ 帰国・外国人幼児児童生徒保護者会の開催
 - ・第1回(11/24)
言語(母語・外国語)保持の方法について情報交換するとともに、世界各国と日本の教育制度を比較して意見交流
 - ・第2回(3/2)
帰国・入国・出国の際に不安に思ったこと、海外での学校体験談及び、日本の学校に望むことなどを中心に活発に交流
- ウ センター校便りの発行
西宮市の国際教育についての様々なニュース等を掲載して、各学校園及び帰国・外国人幼児児童生徒(保護者)全員に配布して情報の共有を図る。国際教育先進地域の研究・視察等を通して国際教育研究委員会委員の研修を深めることができた。
- ア 埼玉県さいたま市国際化推進地域研究発表会
- イ 大阪府河内長野市研究発表会
- ウ 東京都荒川区研究発表会
- エ 東京都千代田区研究発表会
- オ 外国人児童生徒等日本語指導講習会
体験入学の受入を積極的に実施して、相互啓発を通じた国際教育の推進を図るとともに、帰国・外国人幼児児童生徒の円滑な受入態勢を充実させる機会とすることができた。(16小学校で28名の受入)

2. 本事業担当教員の国際化推進地域内の教育体制における役割及び活動状況

国際化推進専任教諭は西宮市国際教育研究委員会の要として、帰国・外国人幼児児童生徒の実態調査や受入調査、出入国時の教育相談・進路相談、教育委員会の開催する日本語教室の運営、センター校行事の企画・実行(夏の交流会・保護者会)、センター校便りの発行などを行う。

その他の国際教育研究委員会委員は、帰国・外国人幼児児童生徒の適応指導の

事例研究や、研究保育・授業の実施、国際教育年間モデルプラン作成、国際教育関係冊子の作成等を行う。

また、各学校園の国際教育担当者は次の役割を担う。

- ・国際教育研究委員会の研究成果の自校園への普及
- ・帰国・外国人幼児児童生徒の受入及び転出業務
- ・国際教育に関する研修や実践交流会への参加と、自校園の国際教育の充実
- ・帰国・外国人幼児児童生徒の適応指導及び教育相談
- ・帰国・外国人児童生徒に関わる調査
- ・センター校との連携（センター校行事への参加協力等）
- ・国際教育実践報告集の作成

3. 本事業担当教員以外（民間企業、地域の団体、人材等）の活用状況

西宮市国際交流協会

- ・西宮日本語ボランティアの会会員による日本語指導
- ・学校園の総合学習、特別活動、学校行事等における通訳・ゲストティーチャー
学校サポートにしのみや「ささえ」ボランティア
- ・帰国・外国人児童生徒の学校生活のサポート
- ・学校園の総合学習、特別活動、学校行事等における通訳・ゲストティーチャー
大学関係
- ・国際理解研修の講師
- ・国際関係冊子・文書の翻訳等
- ・学校園の総合学習、特別活動、学校行事等における通訳・ゲストティーチャー
- ・研究授業の指導助言
- ・その他ボランティア
- ・学校園の総合学習、特別活動、学校行事等における通訳・ゲストティーチャー

4. 3で活用した企業、団体、人材等の概要

西宮市国際交流協会

西宮市民の国際感覚と国際理解を醸成し、海外諸都市の市民との相互理解を深めるため、国際交流の普及啓発、各種の交流事業等を推進し、もって、より世界に開かれた西宮市の創造と国際社会の発展に寄与することを目的とする財団法人

学校サポートにしのみや「ささえ」ボランティア

地域の人に指導、協力支援を依頼することにより、その専門的な知識や技術・経験を活用し、学校の教育方針に基づき、学校教育活動を円滑かつ効果的に推進することを目的とした西宮市教育委員会の学校サポート事業

大学関係

- ・近隣の大学の教員、大学生ボランティア及び留学生
関西学院大学、神戸大学、大阪外国語大学、立命館大学等
- ・その他ボランティア
- ・帰国・外国人幼児児童生徒の保護者
- ・地域の在日外国人
- ・友好姉妹都市（フランス、中国）からの研修生等

5. その他特筆すべき平成16年度の取組及びその成果と課題

6年前、42の市立小学校中9校でスタートした小学校英語活動は、本年度、42の全校で実施するに至り、その大多数が年間約18日、ALTとのチームティーチングを行った。本年度は特に、積極的に英語活動に取り組もうとする学校1校に、年間通して毎週4日間ALTを派遣する形をとり、英語活動に関するパイロット的な役目を果たすよう強力に支援した。帰国児童数が市内で最も多い学校でもあり、率先して英語活動に取り組む児童が多いこともあって、授業は活発に進められ、1学期はALT主体の授業が多かったが、2学期以降は、日本人教師が指導案を主体的に作成するようになった。さらに秋には、その学校の保護者のボランティアを指導者として、英語クラブが誕生し、多くの子どもたちが参加して放課後楽しく活動している。次年度も継続して週4日間のALT配置体制を続け、学校と連絡を密に取りながら、カリキュラム作りやクラスルーム・イン

グリッシュの研修などを積極的に計画し、小学校英語活動の充実を図りたい。

また、希望の幼稚園に、カナダ人を保育補助員として派遣したが、補助員が自然な形で子どもたちの遊びに加わることによって、日常生活の中で子どもたちの口から英語が出てくる場面も見られるようになり、外国人との共生を自然な形で幼い頃から体験させることができた。

日本語教室の開設については、の1のでも紹介したが、今年度3月の最終回には、全員が1カ所に集まって日本語学習発表会を行った。日頃、市内4カ所に分かれて日本語の勉強をしている子どもたちは、この1年間のお互いの学習の成果を発表しその努力を認め合うとともに、小学生も中学生も一緒になって、日本語のゲームを楽しみながら仲良く交流することができた。音楽で習った日本の歌を大きな声で最後まで歌ったアメリカの小学生、夏休みにフィリピンのおばあちゃんが遊びに来たときのことを作文に書いて読んだ小学生、日本に来てからの苦労話や日本語の勉強法などを話した中国人の中学生等々。参観した保護者や担任の先生たちも笑顔で拍手して、お互いの子どもたちの学習成果を喜び合うことができた。遠方からの児童生徒を放課後1カ所に集めて合同の会を持つのは大変ではあったが、その成果は充分に見られたので、来年度以降も是非続けていきたい行事である。

6. 平成16年度の成果と課題に基づく今後の課題

小学校英語活動においては、の5に記述したように、本年度ALTの週4日配置校を設けて、西宮市立小学校英語活動の先進校とすることができた。また、国際教育研究委員会の小学校部会では、担任が中心となり子どもたちが主体的に活動できる英語活動の実践研究を進めている。小学校英語活動については、全国的にも様々な工夫・検討が続けられているが、本市においても、より良いものを求めて、さらに研究・研修を続けていきたい。

また、今年度に引き続き、日本語教室をさらに充実させて、効果的な日本語指導が行えるように学校や保護者との連携を図るとともに、学校での一斉授業や取り出し授業でどのように教科指導や日本語指導を行っていくかの研究が今後の大きな課題となる。日本語教室の指導者との連携を強めながら、JSLについての研究と研修に本腰を入れ、それぞれの学校での日本語指導の効果的な進め方を実践・研究していきたい。